

令和6年度 第4回 岐阜市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和6年10月15日（月）10時00分～12時00分

2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6－1大会議室

3 出席者 柴橋市長、水川教育長、伊藤委員、岡本委員、小森委員

4 招聘者 近畿大学附属小学校 教育研究部長 外山 宏行 氏

5 傍聴者 一般2名、報道関係者1名

6 次 第 （1）市長あいさつ

（2）協議

「多様な考え方に触れる学びの充実」

7 議 事

（10時00分開会）

（1） 市長あいさつ

（2） 協議

① 事務局説明

（資料1「多様な考え方に触れる学びの充実」小規模校つながるプロジェクト）

② 招聘者講演（外山 氏）

（資料2「多様な考え方に触れる学びの充実」）

③ 意見交換

○小森 委員

我々の時代だと特別な能力がある人だと思っていましたが、今の子どもたちは、YouTube で見るような動画を自然に将来作れるようになる。動画を見ることでインスピレーションをもらい、もっとこうしたいという循環になってくるのかと思っている。

ICT や授業支援アプリのロイロノートを使って授業をすることは、岐阜市も力を入れている。授業見学に行くとと思うのは、やはり先生によって ICT やロイロノートの有効性や有用性に対する評価が違ったり、使いこなすスキルが違ったり、向き不向きの評価もある。同じ学年でも、このクラスはすごく ICT を取り込んでいるけど、別のクラスを見ると従来型の授業をやっているというところは、過渡期かもしれませんが、ICT が重要であればあるほど、義務教育で差がつくのはいかなものかと感想をもった。

この方向性というのは避けられないとすれば、有用性を感じ、そのスキルを持った教員を増やしていく。教員とは忙しい仕事なので、どのようにバランスを取りながらいけばよいかの考えをお聞かせいただきたい。

○外山 氏

ICT、授業支援ツールを使うのは、やはり先生次第だと思う。本校も、紙かタブレットかの話になったときに、結局使える人は文句を言わない。使えない人が文句を言うので、やはり先生たちがみんな使えるようになるというのが一番大事。使っていなくて批判的、ネガティブな方は使ってみて良さがわかると、一気に変わっていく。だからやはり研修としてその機会を多くもつことが大事だと思っている。

私どもの学校は古い私立学校なので、年配の先生もいて、こんなの使いたくないという先生もいたが、毎学期の実践記録をタブレットで共同編集でしか作れないようにして、使わざるを得ないようにした。使っていくうちに、こんなことができて便利だ、子どもにもやらせてみようという感じがじわじわ広がってきて、今に至っている。先生たちが有用性を感じないと進まない。学校の教員は本当に忙しく、いろんな仕事に追われているので、校内研修や市の研修を大事にし、先生方にできるだけ良さを知ってもらうところからコツコツやっていくしかないと感じている。

○小森 委員

子どものスマホを見ても、アプリがいっぱい入っていて、何に使うのだろうと思うが、子どもはどんどん使いこなせるようになる。最初はうまくいったアプリを授業で使ったり、先生がすぐ真似できたりとか、そういうことも大事ということか。

○外山 氏

私立学校だからできるというところもあるが、私も学級担任を持たせてもらって、ここ4年ずっと小学3年生で、私とICTが苦手という先生があと3人並んで、4人で4クラスを担当している。私からその苦手な先生たちに「一緒にやりましょう」「この授業でこんなことやってみたらどうです」とコツコツやっているところ。どの学校にも核になる先生方がいるので、その先生を中心にじわじわ広げていくことが大事ではないか。そして、情報の共有と交流を多くすることが大事だと思っている。

○岡本 委員

先生方が校内研修で、使い方の交流をしている資料があった。これが子どもたちも含めて本当に大事なところで、ICTを自分で学ぶ部分と、自分にはないものに気付かせる、学び取る場の両方あったので、こうやって進んだと思った。

私達の世代だと、どちらかというと読み書きそろばんで、漢字や単語は書いて手で覚えろと親にうるさく言われ、ひたすら書かされた。今は、子どもがどうしようか迷いながら様々な方法で取り組んでいるが、結局、漢字の書き順が書けるようになってきているということもある。身に付ける方法が以前と変わってきていると感じている。触れ続けることは、絶対的な時間の問題で、手法が変わっても身に付いてくると発表を聞きながら思った。

今までは、教育のゴールは「人前で喋る」「喋って発表する」ことだった。今はテレビでもアナウンサーではなくAIがニュースを読む。そうすると子どもたちも自分が発表しなくてもAIに発表させたり、もしくは人前で話すのが怖いので、自宅や人のいないところで撮った動画を出して発表したりできる。そうすると、教育の現場として子どもたちに身に付けさせたいものや身に付けてほしいものが、少し意味合いが変わってくると思う。この辺りを教育委員会や学校の現場で、ある程度コンセンサスをもっていかなないと、学校ごとのばらつき、もっと言えば先生ごとのばらつきが出てしまったときに、公教育としてどうかと思った。

質問として、岐阜市の場合はリアルというものを「ぎふ MIRAI's」も含めて大事にしているが、近大附属小学校では、リアルな学びについて、こういった取り組みをされているか。

○外山 氏

身に付ける方法はすごく変わってきている。ただ面白いと思うのは、子どもたちはかなり流暢に喋っているが、原稿は全部ノートに手で書いて、家で何度も読んで練習している。ベースになっているのは、今までやってきたこと。デジタルになったから今までのことがいらなくなったのではなく、今まで書かされ読まされていたものが、自分で必要を感じ、主体的にやるようになってきているところかと思う。

私達の時代は書くことが勉強と言われ、何度も書かされたが、実は本校は今年度から紙の問題集をやめて、全部デジタルドリルにした。今までのドリルだと得意な子もできない子も同じ問題を同じ量だけやらされた。翌日学校へ行き、先生に丸付けをしてもらうまで間違っているかどうか分からない。やり直す頃にはもう間違えて覚えている。それをデジタルにすると、その場ですぐにやり方がわかる。先生や保護者が丸付けしてくれるのを待たなくても間違いがわかり訂正できる。反対する先生もかなりいたが、振り切った。昔ながらの漢字テストを毎週やっていて、プリントをやってくることが今までの課題だったが、漢字を教えるところまでは学校で、あとは何をやってもよく、デジタルドリルで練習してもいいし、紙に書いてもいいし、次の漢字テストで80点の合格を取れたらそれでOKということにやり方を変えたら、合格率は遥かに高くなった。結局、習ったとき覚えた子はやらなくていいし、逆にできない子はプリントを1回やるだけでなく、何度も何度も練習する、形だけやるのではなく身に付いたかという観点で、方法は自分で選ぶように変えている。身に付ける方法は、それぞれの子にあった方法を選ばせる。ただ、放っておくと子どもたちは楽な方法を選んでしまうかもしれないので、適切なアドバイスを与えてあげるのが私達の仕事だと感じている。

AI も出てきて、子どもたちに求められる能力も大きく変わっている。これから求められる資質・力について、10年前必要とされていた読み書き計算や正確さというのは、この子どもたちが社会に出る頃には全部消えてなくなっている。コンピューターの方が圧倒的に速くて正確で、子どもたちに必要な力は何か真剣に考えていけないといけない。10年前に必要とされていた力を一生懸命身につけていても、社会に出た時には機械がやるので、そのあたりは本当によく考えていけないといけない。

リアルな学びについて、これまでテクノロジーの話をしてきたが、学校の一番大きな目当てとして、本物に触れることを大事にしています。実は私は、明日から3年生の子たちを連れて比叡山に2泊3日で山に籠る。インターネットで見たり、写真で知ったりしているだけでなく、本物を見に行ったら触れないといけないというのが我々の教育の根本にあり、5年生は東京へ行って国会議事堂、最高裁判所、省庁を回って勉強する。本物に触れる実体験をすることは、絶対に損なってはいけないことだと私は考えている。

○岡本 委員

私は製造業やっており、物を解体する。最近の子だと、鉄がどれぐらい重いか、鉄の製品も軽く持とうとして腰を痛める可能性もあるので、小さいときから文化的にも、産業的にもいろんなものを触れることが大事だと思う。子ども同士のリアルなやり取りがICTでしかできないこと、逆にリアルでしかできないことをこれから考えていけないと感じている。

もう1点、岐阜市は先生の異動が発生する。異動した結果、これまでやってきた授業ができなかったり、今まで活躍していた先生が違う学校に行くと学校環境でうまく活躍できなかったりということがでてくると思うが、そこに何かアドバイスをいただければと思う。

○外山 氏

それは本当にすごく難しい。いくつか自治体と関わらせていただき、学校間格差や管理職の先生方の意識で大きく変わって苦労する話はよく聞き、どうしたらよいか聞かれたけれど、それは答えがない。やはり、「反対」「できない」「わからない」が一番の原因だと思う。とにかく情報共有をして、みんなで知ることが大事。「知らない」「わからない」が反対に繋がっていくので、堅苦しくなく、みんなでやっていくしかないと思う。

私どもの学校でもすごく反対される先生たちがいて、全員の研修には来ないという人もいる。カフェ形式でコーヒーやお茶を飲みながら雑談しているようなところに来てもらって話しをするなど、そういうところからやっている。岐阜市の規模は先生方も多いので難しいが、教育委員会の力もかかってくるのかと感じる。

ただ、「やらない」では通用しない時代が来ている。学力調査も3年後には全部紙を止めるという話も出ているので、ある程度覚悟を決めないといけないと思っている。

○伊藤 委員

学び方というのは個別の授業の学びが深まるだけでなく、興味の幅が広がる、活躍できる子が増える、また自己実現できる力が付くなどよいところがいっぱいあるとあらためて思った。

昨日から岐阜で国民文化祭が始まった。レクリエーションやアート、文化芸術というのもどんどん変わってきていると感じている。昔ながらの紙に絵を書く、楽器を演奏する、そういったことだけでないクリエイティブな活動は、意外と機会が少ない。小中学校でこうした楽しみを学ぶことができるのが、とてもよいことだと感じている。たくさんよいところがある中で、少し危惧していることもいくつかある。

まず、先生の力量によって変わってしまうのではないかということについて、明確になった部分もあるが、ネットのデータ処理技術の問題で、NTTの次世代のインターネットのデータ処理などが今、加速しているところだが、次世代的な戦略があれば、教えていただきたい。

次に、タブレットが文具というのは認識として一緒だが、プラスする付属の製品、イヤホンやタッチペンは、各自がそれを持っているということか。公教育だと、それを家庭に買って持ってきてくださいということが言いづらく、持っていない子がほとんどである。現実的に私はもう必須としたほうがよいのではないかと思う。先日も生成AIを活用した授業を見て、想像したよりもとてもよいものだった。子どもたちはAIとだけ対話しているのかと思ったら、教育に特化したAIだけあって、簡単にAIから答えを出さないし、AIから出たヒントを友達とさらに相談したり深めたりしている。そこで不便そう見えたのは、入力を指でしたり文字を書いていたこと。英語の方の生成AIの授業は見えていないが、多分音声で行っていくので、イヤホンがないと難しいと感じている。付属の製品を使うとよいものがあれば教えていただきたい。

小規模校つながるプロジェクトについて、今進めているが、大企業も今リモートが禁止になったところが結構増えている。先日、全国から集まっての会議が東京であり、オンラインで参加してもよいかをたずねたら、オンラインは認めませんとはっきり言われた。委員長の判断だが、リモートによるコミュニケーションの不自由さが、リモートにふさわしい場面とそうでない場面があるのだと感じている。一斉に情報を共有し、教えて、それに対して質問が来る程度であればリモートでよいと思うが、濃い交流は、やはり触れ合うことが大切だと思っている。

例えば1人が言ったことに対しての掛け合い、「それは違う。」とリモートではなかなか言えない。そういう難しさがリモートではある。小規模校もリモートで繋ぐというのは、もちろん1つの手段として大切だが、やはり子どもたちが集まって一緒に学んだり、給食を食べたり、遊んだり、今は多分仲間作りとして各校で集まるということはあるとしても、深い議論を進めるということまで、なかなか半年に1回では難しいかと思うので、そういった交流の機会を次年度から回数を増やしていただきたいと思うが、その点についても聞きたい。

いくつか質問したが、最後に一点。子どもたちはiPadを毎日持って帰ってくるが、正直今は時間割を見るしか家での使い方がないので、自宅でのタブレットの使い方があればお聞きしたい。

○外山 氏

データについてはこれからどうなっていくか、私もわからないが、繋がりにくいというのが学びの妨げになってくることは明らかだと思う。ネットワークの造形というのは必須だと思う。特に学校全体で一斉にデジタル教科書を開く、そして支援アプリを使うとなったときに、貧弱なネットワークで「今日は繋がりにくい」では、子どもたちの学習意欲をそぐことになってしまう。もちろん自治体の仕事になると思うが、ネットワークの増強というのは、必要になってくるのは確実だと思う。

2点目の付属品については、実は学校で買うお金がないので、個人で買ってもらっている。タッチペン、キーボード、イヤホン全部自由にしている。紙に書きたい子は紙に、タブレットに書きたい子はタブレット、タイピングできる子はタイピング、自分で一番よい方法を選びなさいと自由にしている。ただ文科省が学力調査をCBT化するらしいので、これからキーボードだけは必須だと感じている。英語で必要なのでイヤホンは必須ということで必ず持たせている。

動画などをみんなで黒板を見ているが、1人1人の端末で見たいところを自分で何度も見る方が絶対効率的だと思う。そういう優秀な動画教材がたくさんあるのに自由に見ることができないのは全く個別最適ではないので、イヤホンは必須にしている。本当は指でもよいが、指でいくら書く練習をしても、現状のテストは紙なのであまり意味がなく、タッチペンを持つように子どもには勧めている。

付属品を自治体で揃えるのは非常に難しいと思う。ただ、あればあるだけ、個別最適な学び方は進んでいくと思う。ICTを使うと個別最適な学び、個人に合わせた学びはすごく進んでいくが、

授業中の子どもたちの姿を見ていると、同時に非常に協働的である。教え合ったり、友達と見合ったり、今までの先生の話聞く授業と比べると、圧倒的に子どもたちが自然と意見交流したり考えを聞き合ったりする姿がたくさん出てくるので、本当に個別最適な学び、協働的な学びが自然と一体化していると感じる。

小規模校のリモートの話もあったが、リアルな対面、リアルに学び合うのが一番大事なところだと思っているので、先ほどの事務局発表で、朝登校して下足のところで他校の子とオンラインで「おはよう」と言い合っていたのは本当に素晴らしい。コロナ禍以降、保護者会もリモートで説明会することが増えて、実際に保護者に来てもらう時とリモートでやる時の明確な違いは、学校から一方的に情報発信するときは、リモートもしくは動画配信にしている。年度当初に学校方針説明会というのをやるが、以前は体育館に椅子を大量に並べていたが、それも校長が一方的に情報発信するだけなのでリモートか動画配信で、保護者に来てもらう場合は、保護者から意見を聞いて、その場でアンケートを取って、それを議題にして話をするというような双方向でないと意味がないときに保護者に来てもらっている。明確なすみ分けというのは、本当に必要かと思う。先生方は大変だが、交流の回数は増えるといいと思っている。

家庭での使い方について、授業の中で完結するタイプの授業をしていると、宿題以外に家に帰って子どもたちはやることがない。国語の授業の動画を見てもらったが、動画のような授業をしていると、子どもは家に帰って本を読んで同じようなものを作ったりする。また、自由進路の学習をしていると、先に授業を進めてくる子も出てくる。

私のクラスでも、算数で教科書は家で全部やってきたという子も出てくる。その授業を45分の1単位区切りのことをずっとやっていくと、子どもたちは家でやることがなくなるけど、それが単元全体で見通して、子どもたちが工夫できる余白が生まれれば、いろんな考えが増えてくると思う。先生の力量と言ったが、先生たちの工夫について、本当にできるだけ多くの先生方に浸透していくように研修をしていく必要があると思う。

○水川 教育長

学校教育は「先生がクエスチョンを出し、子どもがアンサーで、正解は先生が握っている。」というのがダメなことは分かっているが、どうやって変えていくのかと考えると、やはりプログラムに対してのソリューションという考え方で教育しなければいけないし、正解ではなくて納得回答ということも今日の話を聞いて思った。一番感激したのがアウトプットの重要性で、「魅力的なアウトプットは良質なインプット」という言葉がすごく刺激的だった。学習指導要領でも見方・考え方を働かせると言っているが、見方・考え方はそれ自体では存在しない。表現とか学び方を発揮する中で見えてくるもので、結局アウトプットに着目して授業を構築すると子どものもっている見方・考え方が浮き出てくるし、逆に過程を通して鍛えることができる。すごく勉強になった。学級でのSNS活用もすごく面白く、子どもたちにはそういう力があるのだということがわかった。

質問で、学級集団や学習集団を日本中の学校がすごく大事にしている。今の学びは、個別最適で子どもが中心になるが、それについて何か特徴的な考えはあるか。

○外山 氏

特に意識はしていないが、やはり子どもたちに選択肢を与えることで、自然と集団作りができていくところはあると思う。先生がまとめていこうという形でやっていると、どうしてもこぼれ落ちる子がいて、集団としてまとまりに欠けていくが、子どもたちに選択肢を与えていくと、まとまるときはまとまる。私も一斉の授業をやるので、そういうときはぐっとまとまっていくし、休み時間も自分たちで考えて、こんなことやろうということができていくので、授業で集団ができると思うので、それは一斉に何かするということはしなくても、子どもたちが必要感で学んでいくのではと感じている。

○水川 教育長

もう一点、自由進度学習の話が出たが、岐阜市はコンパスカリキュラムがあって、1015時間を新任の先生でも全時間できるようなカリキュラムを持っている。ネット上にあるので誰でも使えるが、近大附属のカリキュラムは、自由裁量というすごく大きいカリキュラムということでよろしいか。

○外山 氏

こうしたうまくいくというところがまだない。私達は完成形を持っていないので、日々研究しているところ。

○柴橋 市長

非常に具体的な現場での実践と考えであった。会議冒頭に岐阜市の姉妹校訪問の話に触れたが、結果的に最後はアウトプットが重要だということを感じた。自分の言葉で自分の思いをどう相手に伝え、相手の思っていることを理解、承認しながら、次の言葉に続けていく。ウィーンやフィレンツェの姉妹校で様子を見てきたが、ヨーロッパは移民の世界で40か国ぐらいの言語で価値観も非常に多様な中、フィレンツェの中学校では積極的に手を挙げて発信していた。だからそれに対して、岐阜市の中学生たちがどうリアクションするかが非常に興味深かった。

掲示板のアプリや学級内の SNS など、非常に形はリンクしていて、おそらく学級内の SNS で承認し、ワーキングも適切に選びトレーニングしながら、あとはイングリッシュにするだけで、掲示板のアプリを使って、スコットランドの皆さんとコミュニケーションできる。そういうことが

何の支障もなく日常的に行うことができる。そのためには相手のことを理解し、英語で自分の思いを伝えることが当たり前になっている。そういうアウトプットが、子どもたちが学んでいく意味ではないかと非常に痛感した。

姉妹校と言いながら、日々のコミュニケーションがなかなかないので、今回はオンラインがあるじゃないかと私も声高に言って、実際行ったわけですが、私が姉妹都市に行くからやるということでは意味がない。日常的に、時差の問題は少しあり、ギリギリ7時間ならできるのではという中で、掲示板ならタイムラグがあっても朝起きたらリアクションが返ってきていて、朝学校へ行ったら、まず「いいね」しようとか、そういうことができるようになると、姉妹校でお互いの信頼関係もあり、子どもたちにとっては貴重な学びになるのではと改めて感じた。

特別なものではなくて、日常のもので普通に使いこなして、その上で何を学び取っていくかなんだということを、これからも私達の現場の中でそういう考え方を基本に置いて、子どもたちを指導できればと思った。

(12時10分開会)